

# ひまわりとほりん



+Y\_NRG SYSTEM 2004





ポリンは、目を覚ましました。

なんとなく憂鬱な朝。

なぜでしょう・・・体が重く感じました。

それでも、お腹がすいているので、朝ご飯を探しに出かけました。

ゼロピーをいくつか拾って、お腹いっぱいポリンは、  
木陰で少し休むことにしました。

すると、どこからか声がします。

「ぼくもお腹がすいたなあ。」

その声があまりに近くで聞こえたのでポリンはびっくり。

なぜなら、周りには誰もいなかったからです。

ポリンは聞きました。





「きみは・・・君はどこにいるの？」

するとまた声がします。

「ぼくは・・・僕はここにいるよ。」

でも、姿は見えません。

「きみは、ご飯をたべないの？」

と、ぼりんは、不思議に思って聞きました。

すると、また声がありました。

「ぼくは、太陽のあたる丘の上じゃないとだめなんだ。」

姿の见えない彼は言いました。

「ねえ、太陽のあたる丘の上に行ってくれないかな。」



ポリンは、重たい体がんばって動かして、丘の上まで行きました。  
転がり落ちそうになりながらも、何とか到着したポリンは言いました。

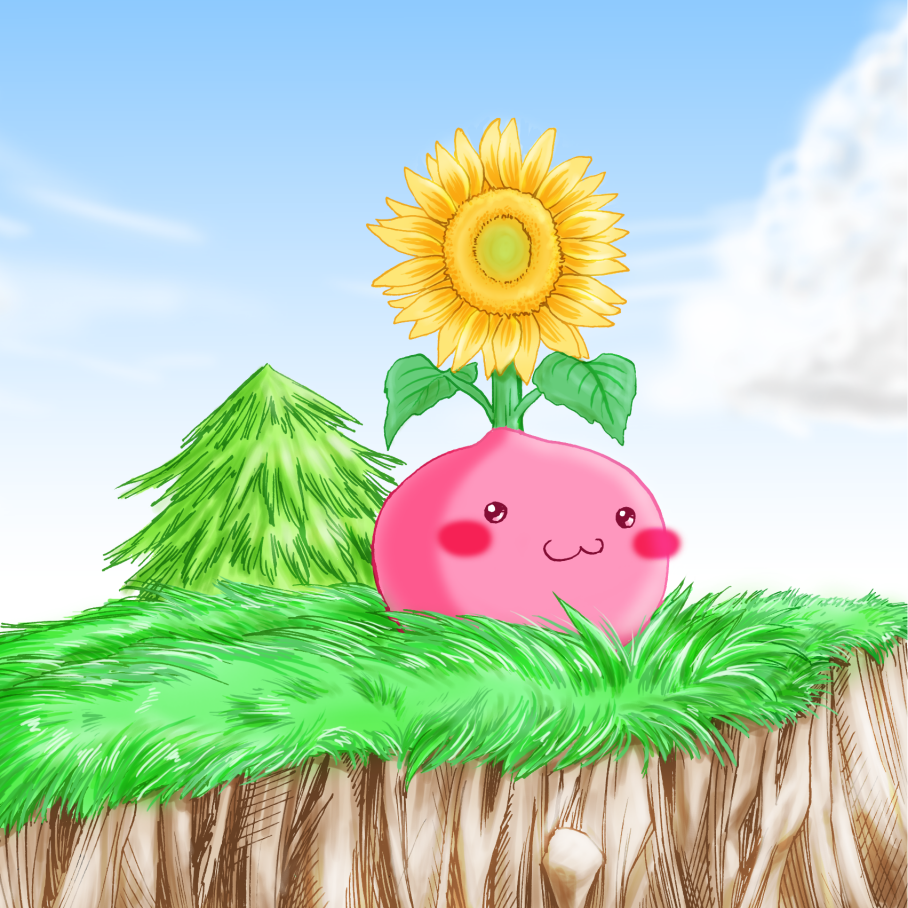
「ここでいいの？」

すると、また声がします。

「ありがとう。ここだと太陽の光がおいしいんだ。本当にありがとう。」

その言葉を聞いて、ポリンは、とてもいい気分になりました。





次の日、ポリンは昨日よりも体が重く感じました。  
そして、昨日のことを思い出し、言いました。

「きみは・・・君はまだいるの？」

すると、また声がします。

「ぼくは・・・僕はここにいるよ。」

ポリンは、いつものように朝ご飯を食べました。  
そして、姿の见えない彼のために丘の上に向かいました。  
転がり落ちそうになりながらも、何とか到着したポリンは言いました。

「ここでいいかな。」

すると、また声がします。

「ありがとう。今日も太陽の光がおいしいよ。本当にありがとう。」

その言葉を聞いたポリンは、嬉しくて疲れも忘れるほどでした。



次の日、ポリンは昨日よりもずっと体が重く感じました。  
そして、また昨日のように言いました。

「きみは・・・君はまだいるの？」

すると、また声がします。

「ぼくは・・・僕はここにいるよ。」

ポリンは、またいつものように朝ご飯を  
食べました。  
そして、姿の见えない彼のために、また  
丘の上に向かいました。

何度か転がり落ちながらも、何とか到着した  
ポリンは言いました。

「ここでもいいよね。」

すると、また声がします。

「ありがとう。君のおかげで太陽の光が  
おいしいよ。本当にありがとう。」

その言葉を聞いたポリンは、幸せで傷の痛みも忘れるほどでした。





それから、何日も何日も、ポリンは丘の上に行きました。

そして、だんだん体が重くなっていきました。

